共に生きる地球の仲間たち

スージーの贈りもの

元上野動物園園長
茨城県自然博物館館長
中川志郎

海竜社

共に生きる地球の仲間たち

スージーの贈りもの

元上野動物園園長
茨城県自然博物館館長
中川志郎

海竜社

〈著者略歴〉中川志郎（なかがわ　しろう）
1930年茨城県生まれ。宇都宮農林専門学校獣医畜産科卒。
1952年より上野動物園勤務。ロンドン動物学協会研修留学の後、東京都立多摩動物公園園長、上野動物園園長を歴任。その間、初来日のパンダ、コアラの飼育を指揮。
現在、ミュージアムパーク茨城県立自然博物館館長を務める。文部省生涯学習審議会、総理府動物保護審議会委員。（財）日本動物愛護協会理事長を兼務。
主な著書に『子育て論』（エイデル研究社）、『動物から教わったこと』（アスペクト社）、『動物考』（未来社）、『動物たちの昭和史』（太陽企画出版社）等他多数がある。

共に生きる地球の仲間たち
スージーの贈りもの
平成十一年八月二十七日　第一刷発行

著　者＝中川志郎
発行者＝下村のぶ子
発行所＝株式会社　海竜社
東京都中央区築地二の十四の一　〒一〇四―〇〇四五
電話＝　〇三（三五四二）九六七一（代表）
FAX　〇三（三五四一）五四八四
振替＝〇〇一一〇―九―四四八八六
印刷所＝新協印刷株式会社
製本所＝大口製本印刷株式会社
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします
©1999, Shiro Nakagawa, Printed in Japan
ISBN4-7593-0602-1

共に生きる地球の仲間たち

スージーの贈りもの——目次

1 動物たちの贈りもの

スージーの贈りもの――8
逝ってしまったビル――11
私の先輩たち――16
ありし日の関根さんと愛象ジャンボ――21
私の動物園、キボコの国――26

2 生命(いのち)と愛の物語

マントヒヒの掠奪(りゃくだつ)結婚とその愛――32
ゴリラの住む森――37
ゴリラのスワッピング――42
オオサンショウウオの動物園――47
花と動物・生命(いのち)の季節――52

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

3 センス・オブ・ワンダーの力（ちから）

みずみずしい感動の心を——58
ウサギと子共たち——63
ペンギンと少女——68
ハイビスカスの動物園で——73
ゾウさんにさわった！——78

4 心の絆が育てるもの

フォックス博士に聞いたキツネとイヌの話——84
幸福な日本のコアラたち——89
長尾鶏（ながおどり）との出合い——94
コンドルの家族——99
「グース」と刷り込み——104

5 日中を結ぶパンダたち

分らないことは動物に聞く——110
双子のパンダ便り——115
さよなら悠悠（ユウユウ）——120
中国からのメリークリスマス——125
永遠にさようなら、フェイフェイ——130

6 失われていくトキの保護作戦

トキの能里ちゃんを求めて——136
親どりも見分けられない擬卵——142
〝キン〟との再会——147
日中トキ会議——152
たった一羽のオストキ〝ミドリ〟の死——158

7 博物館はなぜ必要か
手で見る博物館 164
牛の博物館、カウベルに誘われて 169
ユニークなねこの博物館 175
スミソニアンの風 180
8 動物と共生(いき)るということ
動物との共生を求めて 186
カモノハシがやって来る? 191
警戒心のなくなったキタキツネ 196
三宅島のイタチ(鼬)ごっこ 202
イルカ騒動が語るもの 208
9 人は自然の一部だ
ネイチャーゲームという環境教育 214

琵琶湖の魚たちの悲劇——219
カワウソの悲しみ——224
森は海の恋人——229

10 人間だけが地球の王様ではない

オンリー・ワン・アース——236
人間が演奏する悪魔の四重奏——241
タマゴ博覧会、不思議に満ちた自然界——246
フィヨルドのアザラシ——251
生きものはみんな繋(つな)がっている——256
あとがき——261

ブックデザイン／豊田正太郎

1

動物たちの贈りもの

スージーの贈りもの

その晩、私は眠れなかった。

たった一粒のキャラメルがこんなに心を弾ませ、こんなにも心を豊かにしてくれるとは思いもかけなかったことである。私は掌（てのひら）の上で軟らかくなってしまったキャラメルを飽かずに眺め、その茶褐色の表面にある細かな格子模様までしみじみと指先でなぞった。嗅いでみると微かな獣の匂い、チンパンジー特有の干し草のような体臭が少しだけ移っているように感じられる。

実はこのキャラメル、チンパンジーのスージー（Susie）にその日初めてもらったものなのである。忘れもしない昭和二十九年（一九五四）七月二十九日、午後五時過ぎのことだ。

当時、スージーは動物園の大スターであった。昭和二十七年（一九五二）の「動物

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

園復興まつり」の主役として登場し、その類稀(たぐいまれ)な人なつっこいキャラクターと抜群のパフォーマンスによって忽ち人気者になり、スージーのショーを見るためだけに動物園通いする人も出るほどだった。その利発さはステージだけでなく、日常生活でも遺憾なく発揮された。ステージに出る日、トレーナーの山崎さんは途中の売店で十円のキャラメルを一箱買うのを常としていたが、暫(しばら)くするとスージーはその意味を理解してしまったのである。

試みに山崎さんが十円を渡してみると、スージーはそれを握りしめ、いそいそと売店に行き、驚く売り子に硬貨をさし出しキャラメルをせがんだのであった。

そしてこのことはステージのある日の恒例となり、番外のパフォーマンスとして更に人気を高めたのである。しかし、行動学的に見て注目されたのは、十円を払ってキャラメルを獲得したスージーが、その所有権を主張したという事実であった。それは大げさにいうと貨幣経済の起源に関わりをもつと考えられたからである。

確かにスージーは容易にキャラメルを人にくれない。山崎さんを別にすればよほど心が通っているか、一目置いているかの相手だけであった。いつの間にか飼育係の間ではスージーにキャラメルを貰えるか否かが大きな関心事になったのである。それは、

飼育係の実力を示す掛け値のない評価のようにとられていたのだ。スージーは実に人をよく見ていて、上っ面だけのお世辞やお追従はたちまち見抜いてしまったからである。それだけに、就職後たった二年目の、しかも臨時職員に過ぎない私が貰うなど到底考えられもしなかったのだ。

「スージーがくれるっていうんだ。遠慮せずにもらっておきな……」

手を出しかねている私を見て山崎さんがいった。羨望の視線が注がれているのが分って全身の筋肉が細かく震えだす。おそらく、園内の独身寮にいる身軽さで、毎晩のように彼女を訪問し、他愛のない時間を共に過ごしていたのが評価されたのであろう。本来、群れ生活であるべきチンパンジーが、動物園内では単独生活であり精神的に辛いものがあったにちがいないからである。その意味でいうなら、評価というよりも、ひとりの仲間として受け入れてくれたということかもしれない。

私は、掌の上ですっかり軟らかくなってしまったキャラメルを遂に口の中に入れる。舌の上に載せてじっとしていると、微かなスージーの匂いと共に甘味と温もりが口一杯に広がっていく。後にも先にもあんな美味しいキャラメルは食べたことがない。

（日本経済新聞　1999・6・20）

逝ってしまったビル

いつものようにパンダ舎をのぞく。
いつものようにゾウ舎わきの坂道を下る。
いつものようにゴリラのブルブルに朝のあいさつをおくる。
いつものように止り木の上のオランウータンに言葉をかける。
いつものように……。
そう、チンパンジーの屋外運動場には、いつものように言葉をかけるべきビルはもういないのだ。
ガランとした運動場には、メスのベレーだけが所在なさそうにポツネンと座っている。私は、その空間の中に、いるはずのないビルの姿をさがす。
あの扉の、あのうしろの通路から、今にもビルが出てくるような錯覚がある。

口ひげやほおひげが白毛に変り、肩口から背中にかけて肌が裸出し、渋柿色のくすんだ光沢がその年輪の深さを物語っていたビル。

声をかけると、自らの年齢も忘れたかのように、若い時と同じように、四股をふみ、手を鳴らし、全身をバネにして跳躍していたビル。上眼づかいにこちらを見、考えこむように居ずまいを正すビル……。

しかし、いつまで待っても、もうビルは出てくることはない。

七月二十二日夕方、ビルは逝ってしまったのだ。ベレーが立ち上がって台の上に乗り、いつものように、くるりと下唇を反転させ、頭を上下に振ってこちらを見る。

「とうとう独りになっちゃったね……」

私は語りかけるともなく呟く。

それはベレーへの語りかけというよりも、私自身への呟きであったかも知れない。

この広い上野動物園の、数ある動物たちの中で、四十年近くを共にすごしてきたメンバーは、ビルとゾウのジャンボだけで、私にとっては、かけがえのない先輩だった。

私が上野動物園に入ったのは昭和二十七年（一九五二）の四月だが、ビルはそれよりも一年前、昭和二十六年（一九五一）五月にはすでに動物園にいた。

昭和二十七年に開催された上野動物園創立七十周年記念祭のイベントのひとつ、アニマルショウの重要なメンバーとして入ったのである。

戦後初めて日本に来たチンパンジーであった。当時七歳、メスのスージー（当時三歳、一九六九年三月二十日死亡）と一緒の来園で、共にチンパンジーショウのスターとして期待されての来日だったのである。

アメリカ・ハーモサビーチ（カリフォルニア）にあるマリン・エンタープライズからの動物だけあって、すでに若干の調教は施（ほどこ）されており、ビルは三輪車乗り、スージーはテーブルマナーなどをレパートリーにもっていたようである。

だが、ビルはステージの花形にはならなかった。七歳といえばすでに性成熟に近かったし、しかもオスであったから、新しい調教になじむには困難であったのであろう。

私が入った時、スージーはすでにステージ内外で有名であり、マスコミへの登場も屢々（しばしば）であったけれど、ビルはいつもとり残されたように部屋にいることが多かったようだ。かつての調教の名残であろうネックレスが、よけいに哀愁をさそうようであった。

私は妙にそんなビルに魅かれた。男独り、園内の独身寮で暮らす臨時職員の私にとって何か相通ずるものがあったのかも知れない。

夜間、独り居の無聊さから、類人猿舎を訪ね、ビル、スージーの二頭としばしの時間をすごしたことも何度あったことか。

そのたびに感心したのは、ビルのスージーに対する思いのようなものであった。まるで兄が妹に対するように、いつもいたわりのような動作が随所に見られたのである。

私たちは、この思いが異性どうしの愛情に発展することを希ったけれど、スージーがステージを引退して（昭和三十一年九月）、ビルと同居するようになっても、この関係は遂に変ることがなかった。幼時から共に育った類人猿のオス・メスの間に性的感情は育ちにくいといわれるが、まさにその典型だったのかも知れない。

そのため、スージーに代って新しいメスを同居させたことも何回かあったが、それでも成功することはなかった。

スージーに対しては限りないやさしさを示すビルだったけれど、他のメスには攻撃的で、性的魅力の大きな相手には殊更に強く反発したような気がする。それが、性的学習の機会をもたなかったための戸惑いなのか、スージーへの思いがそうさせたのか、ひとつの謎だ。

ただ、昭和六十年（一九八五）一月に、最後の同居者となったベレーとの間に人工

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com